



# ホテルアイリス

2021年/日本・台湾合作映画

配給：リアリーライクフィルムズ、長谷工作室/100分

2022 (令和4) 年3月9日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本：奥原浩志

原作：小川洋子「ホテル・アイリス」

出演：永瀬正敏/陸夏/菜葉菜/寛一郎/マー・ジョーシャン/パオ・ジョンファン/大島葉子/リー・カンション

## 👁️👁️ みどころ

小川洋子の“禁断の小説”を映画化した本作は、“倒錯の愛、欲望の涯で”が“圧倒的な映像美”で描かれているらしい。日活ロマンポルノが絶えて久しい今、こりゃ必見！

「ホテル・アイリス」を台湾のさびれた海沿いのリゾート地に設定したのがミソ。謎の“ロシア文学”翻訳家も陸夏扮する台湾人女性もそこにはよく似合うが、一步間違えば倒錯の愛も単なる“変態オヤジ”に・・・？

さらに、「かがみのなか わたしとあなた あいのはて」という女性心理を理解できない私には、本作の結末？？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆チラシには「小川洋子禁断の小説を、気鋭の映画作家が圧倒的な映像美で遂に映画化！」「倒錯の愛、欲望の涯で」の文字が躍っている。そして「すべては生と死の間を漂う波にさらわれ、引き返せない彼方へと消え去ってゆく。そのはかなさが、残酷なほど深く胸に刻まれる。—小川洋子（作家）」という、なんとも印象的な文章が！

主演男優は芸達者な中年男・永瀬正敏だが、主演女優は台湾の陸夏（ルシア）。しかも、台湾で有名なツイ・ミンリヤン監督のすべての作品に俳優として参加している、リー・カンションがちょい役ながらも登場しているらしい。そう聞くと、こりゃ必見！そう思ったが・・・。

◆私は先日89歳で亡くなった作家・石原慎太郎の『遠い夢』を月刊誌「新潮」2022年4月号を購入して読んだ。その後、「文藝春秋」4月特別号では、絶筆『死への道程』が掲載されたため、これも購入した。学生時代に書いて1967年に芥川賞を受賞した『太陽の季節』と対比しながら、2022年に書いた絶筆『死への道程』を読みたいものだ。

他方、小川洋子の名前を、私は『妊娠カレンダー』（90年）や『博士の愛した数式』（03年）の作家として知っていたが、小説を読んだことはなかった。ネット情報によると、

彼女の作風は、日本の伝統である「私小説」からは遠く、内田百閒や川端康成の幻想小説に近いそうだ。映画『博士の愛した数式』（06年）『シネマ10』（177頁）を観た時はそうは思わなかったが、本作を観ると、まさにこりゃ「幻想小説」！

◆本作の舞台は、さびれた海沿いのリゾート地に立つホテル・アイリス。主人公はロシア文学の翻訳家だが、彼が1人で住んでいるのは小舟で少し渡った孤島だというから、その設定からして幻想的！しかも、ホテル・アイリスは日本ではなく、台湾の架空の島にあるらしい。なるほど、なるほど。そりゃ、弥が上にも興味を引き立てるし、リー・カンションの存在感も、台湾女優・陸夏（ルシア）の魅力も一層引き立てるはずだ。

他方、原作は禁断の“エロス”小説らしいから、その方面からも興味津々。そう思っていると、冒頭からホテル・アイリス内で主人公の“倒錯の愛”が炸裂！？さあ、その後の展開は？

◆永瀬正敏は背が低いから、高橋英樹や役所広司のように、時代劇でかつこい侍役を演じるには適さない。しかし、芸達者だから、現代劇なら善人役から悪人役まで、また紳士役からエロおやじ役までなんでもござれだ。そんな永瀬が本作では前述の役を演じているから、ある意味カッコいいところもある。ところが、冒頭の“倒錯の愛”の展開を見ると、アレレ・・・。

さらに「禁断のエロス」を原作にした本作のスクリーン上には、エロおやじを通り越し、“変態おやじ”と言わざるを得ないロシア文学翻訳家の姿が・・・。アレレ、日活ロマンポルノはとうの昔に終わったはずだが・・・。

◆私は中年のエロおやじ、変態おやじの気持ちや性癖は理解できるが、陸夏（ルシア）演じるマリのような若い女性の心理と生理は理解できない。特別魅力的とも思えないこんな中年男に、なぜマリは惹かれていくの？なぜ突然ベッドシーンに入っていくの？しかも、禁断のエロ小説が原作とはいえ、なぜそれがSMの世界、変態の世界なの？これは変態おやじの巧みな調教のたまもの？それともマリの心の中に、もともとそんな性癖が詰まっていたの？

チラシには「かがみのなか わたしとあなた あいのはて」と書かれているが、本作中盤以降、この言葉が大きな意味を持つてくるので、それに注目！なるほど、マリのような女は、鏡の中に映る自分を見て、こんなことを考えているの・・・？

◆東宝の人気映画『マスカレード』シリーズ（19年、21年）ではホテル・コルテシア東京の豪華さが売り物（『シネマ43』（251頁））だが、本作ではホテル・アイリスの静かな佇まいと海との距離感が大切だ。他方、スクリーン上に映る海辺には、そこに打ち上げ

られた死体がよく似合う・・・？しかし、推理小説ではない本作にもそんなシークエンスが登場するので、それに注目！

孤独な中年男がその犯人ではないかと疑われたのは当然。しかも、彼はマリの目の前にしばらく登場せず、翻訳家の甥だという男（寛一郎）がその代役を果たしていた（？）から、なおさらだ。しかし、「とんだ濡れ衣だよ」と言いながら、再び中年男が登場してくると・・・？

◆マリが心の中に闇を抱えていたのは、台湾人の父親が不慮の事故死を遂げたため。母親（菜葉菜）は、今やその悲しみをすべて忘れたかのように若い男と遊び回っていたから、マリの悲しみはなおさらだ。すると、マリが見る鏡の中に映る姿は、マリ自身？それとも・・・？

ラストまでそんな謎を抱えたまま展開していく、あくまで幻想的な本作を、半ば、日活ロマンポルノを観るような感覚で、精いっぱい楽しみたい。

2022（令和4）年3月11日記